




吉田精一

新潮選書



古典文学入門〈新潮選書〉

© S. Yosida 1968 Printed in Japan

昭和四十三年五月五日 印刷  
昭和四十三年五月十日 発行

定価四四〇円

著 者 吉 田 精 一

発 行 者 佐 藤 亮 一

活 版 塚 田 印 刷 株 式 会 社

製 本 神 田 加 藤 製 本 所

東 京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 十 一

発 行 所 株 式 会 社 新 潮 社

電 話 東 京 二 六 〇 局 一 一 一 一 ( 大 代 )  
振 替 東 京 八 〇 八 番

(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

目

次

序章	古典文学の表現……………	七
第一章	やまとは国のまほろば（記紀の歌謡）……………	三五
第二章	籠 <small>こ</small> もよみ籠もち（万葉初期）……………	四二
第三章	筑波山に登る歌（万葉後期）……………	五三
第四章	発見と創造（万葉より古今へ）……………	六五
第五章	貫 <small>ぬき</small> 河 <small>かは</small> （催馬楽）……………	八一
第六章	狩の使（伊勢物語）……………	九五
第七章	七月の朝（枕草子）……………	一〇九
第八章	花の宴（源氏物語）……………	二二五

第九章 ほとけはつねにいませども（梁塵秘抄）……………二四三

第十章 海道下り（平家物語）……………二六三

第十一章 女の性は皆ひがめり（徒然草）……………二七九

第十二章 一期は夢よ（閑吟集）……………二九五

第十三章 唐辛子の巻（芭蕉の連句）……………三〇九

第十四章 うそもただは聞かぬ宿（西鶴「胸算用」）……………三二九

第十五章 かみなりをまねて（川柳）……………三四七

第十六章 昔自慢のうそ（三馬の滑稽本）……………三六三

あとがき……………三六一



古典文学入門



序章  
古典文学の表現



桂離宮



日本国民が大體において芸術的な国民であつて、宗教的でも、哲学的でもない、科学的でもないといふことは、定評がある。国民性といふことは、社会や時代の發展とともに変化もするし、今日以後の國際的社会にあつては、次第にその特性を弱くして行くに違ひない。しかしこれを鎖国時代までの、すなわち明治以前の日本に限つて見れば、まぢがいなく現代の文明国間にあつて、もっとも早く独立国家を形成し、かつ均質的ホモジニアスな人種性を維持している国の一つである。

たとへばドイツとフランスはもと同一国家から出たもので、九世紀のなかごろからはじめて、独立の歩みをはじめたといわれる。日本の国家成立が、それより何世紀かさかのぼりうることは改めていうまでもない。そしてまたたとへばフランスにおいては、人種の混血、異種の交配をむしろ誇りとするほどに、多数の人種を混和している。今日のアメリカとなると、さらにその度をはるかにこえていよう。それにくらべると日本は、中国、朝鮮からの歸化人を古代よりふくんだとしても、だいたひ純一に近い人種的条件をもち、外国からの侵略を蒙こうむらず、海にかこまれた島国において、季節風による自然の変化を味わいつつ、温和、繊細、緻密ちみつな感覚を涵養かんかんして来た。

国民の特性を外側から制約するものは、經濟、政治、自然の諸条件である。とくに經濟条件が最も重要なきめ手であることは唯物史觀の説くところであるが、ともかく日本人の性情が現実的であり、觀念的な深刻や、形而上学的な神秘に親しむことの弱かつたのはまぎれもない事

実である。日本人は、少なくとも過去においては、いかなる独自の哲学をも、宗教をも生むことがなかった。彼等は仏教や儒教を借り、それを演繹し、もしくは注釈することで満足したのである。

ドイツ人にとっては「現実」は自律的な妥当性をもたず、また自主的な固有価値をもたず、それは先験的な超現実によってのみ理解され得るのである。こういう精神から、創造的精神の先験的観念論が生れる。あるいは宇宙に沈潜する汎神論が生れる。オールデンベルグの『仏陀』が説くところによれば、インドの住みにくい自然や風土が、解脱に救済をもとめる絶対厭世観的仏教を産んだ。しかし、日本人はむしろスイスの哲人アミエルとともに「理想は現実の上に置かるべきものではない。理想にくらべたら比較にならないほどの、存在しているという長所を現実是有している」と云おうとする。少なくとも経験や事実をあまりにも超越した高邁な理想や、奇怪な空想やを、日本人はかつて、神話のうちにもたなかつたのである。一方論理や抽象にたよって生命や自然を分析するフランス流の科学的精神にもめぐまれていなかった。

国民的性格の特性は、その国の文学の傾向にとくに表現される。日本の国民性が、分析的、論理的でなく、宗教的、哲学的でもなく、現実的であり直観的であるとすれば、日本の文学もまた、抽象的、観念的なものを排除し、日常の素樸な生活体験に密接しようとする傾向が比較的に強い。クルチウスは、フランスの文化意識及び国民意識の中で、文学の占めている地位の重要性を強調し、ドイツで哲学や科学や詩や音楽が分担している機能を、フランスでは文学ひとりで占めている（『フランス文化論』）といった。そのような意味において日本人の文化を文学的といえるかどうかは疑問である。しかし現在の西欧の文明国が、ギリシャ、ラテンを別と

すれば、十一世紀以前に抒情詩をもたなかったのに対して、八世紀に成立した『万葉集』に雑多な階層の人々のすぐれた抒情詩が記録され、それに先立つ記紀以下の諸書に庶民の作品と思える多くの詩篇が収録されていることは、今日の短歌や俳句を作る人々の多さと照らしあわせて、国民の広汎な文学的素質を証明するものようである。

上代貴族制にあつては、文章による試験で官吏を採用する制度もあつたから、自然その方面が発達もした。もっともそれは中国の科擧の制度を模倣したもので、漢詩文の習練が主なものであつたが、和歌がさかんになると、今度はそれが社交上の欠くべからざる用具ともなり、あるいは宮中の歌の競技で、一首の勝負に生命をかける例まで出て来た。

日本文明は大陸文明の継承であり、模倣であり、早い話が『万葉集』にしても全部中国の文字である漢字で書いてあるではないか、という説がある。それは日本に固有の文字がなかつた止むを得ない結果であるが、しかし記紀の歌はもちろん、万葉の歌にしても、題詞の如きを別とすれば、歌を表現する用語として用いられた漢語は、約四千五百首の中で、わずかに十語あるかないかである。しかもそれも末期の一時期的な種々の歌に固まって出ているにすぎない。仮名文字が生れて以後は、思想上に中国の詩文の影響があるとすると、歌や物語の表現の上では、日本のものになり切っているのである。

ところで、日本的な特性とは何だろう。これは大問題で、いろいろな方面から考察すべきだが、ここにはその一面のみをあげよう。日本の庭園は今日アメリカでは大評判である。サンフランシスコの有名な金門公園の中の日本庭園や、ロス・アンゼルススのハンチントン・ライブラリの庭などは、人工的な西洋風の庭園の中にあつて、はなはだ異観というべきである。きわめ

て小ぢんまりとした中に、手のこんだ設計があり、自然を縮写して、局部局部の変化が目をよろこばせる。繊細で、器用で、文化感覚の緻密さをあらわしているが、その一面、自然を一つの形式としてまとめた観が強い。ディテールそのものは細かい鑑賞に堪えるが、どこかせこましいのである。

もっとも日本の名園といわれるほどのものは、借景と称する周囲の山々などの遠景をとり入れ、狭い眼前の小景を大観する用意をととのえていることが多い。外国ではその用意がないから、内地と多少感じがちがうことは当然であるが、何れにしても自然の縮写で、盆景趣味が目立つのである。

このようなことは、文学についてもいえるであろう。日本の物語様式は、平面的、並列的で、時間的な推移はあっても、内面的な発展が見られない。こまかくしらべると、『源氏物語』をはじめ、「ゆかり」を中心とする系譜的な筋が大きい意味をもっている。にもかかわらず、その系譜は、性格の発展や、事件の深化と必ずしも相即さない。そうして論理の統制が大きなスケールの中にぴんと張り渡って、部分が全体ときびしくかかわりあうという種の構成がほとんど見られず、部分が独立して、部分としての完成を主張している。この意味で散文物語においては、絵画的、もしくは絵巻物的な性格が目立つといつてよい。

短い断片的な挿話をあつめた『伊勢物語』はいうまでもなく、『源氏』以前の最長篇たる『宇津保物語』はその代表であろう。物語最大の傑作たる『源氏物語』にしても、並列的な構成で厳密な統一性に欠けている。絵巻物は全部一度に見るべきでなく、小部分ずつを巻きつつひろげて、その部分部分の独立した美しさを味わうべきものであり、中心が場面場面に分散してい

る。そして個々の場面の連絡は必ずしも緊密ではない。

このことは近世に下って西鶴の『好色一代男』『好色一代女』『世間胸算用』その他にも適用されるし、近代の小説、志賀直哉の『暗夜行路』や、川端康成の『雪国』『千羽鶴』などの諸長篇にもいろいろ。極端にいえば、どこでも切れ何時でも完成される。『雪国』や『千羽鶴』が一度単行本として完成された形で出、またさらにそのあとが書きつづけられていることは、世界の文学であまり例がないだろう。どこで切れてもよいということとは、思想の統一に対する、また論理的な構成に対する軽蔑へうでもある。それは他面からいえば、絶えず移動して行く視点の変化を意味することにもなる。

このような文学の性能は、移して文学語としての日本語の性格にもいえるのではないか。

日本語はウラル・アルタイ語族に属する。したがって文法上の特色は、センテンスの切れ目ははっきりしていることである。日本の古文がすべて句読点を用いず、それでさして苦しまずにとりやら読み解けて行けるのは、動詞、形容詞の終止形で終ることがふつうだからである。そのかわりに一語一語は孤立し合わず、相互につながるとも切れるともなくつながる。枕詞や序詞の類は、この性質を利用して用いられている。

次に日本語の音節組織は単純である。いわゆる「五十音図」が音節表だが、それに濁音や拗音を加えたところで、百種類をわずか越えるにすぎない。きくところによると英語の音節は三千種以上もあるという。日本語のこの単純さは、アクセントの貧弱さともなっている。日本語には高低アクセントがあるが強弱アクセントがない。かように音節が単純で、音質が貧弱だ

ということば、ことばの韻律がきわめてとぼしいことに外ならない。

次に語彙ごいにうつると、一般的にいつて語義が精密でなく、語彙がゆたかでない。語義の点は音節の単純さのためからも来ているが、同音異義がきわめて多く、また一語にも多くの別義をふくむことになる。たとえば「あはれ」「をかし」「さび」などの日本文学独自の文学理念さえ、多義を有しているのは人のよく知るところである。語彙がゆたかでないことは前者と関連する。日本語では鳥が啼なくのも、人が泣くのも、猫が鳴くのも、漢字でこそ違った文字を用いるが、すべて「なく」でまにあわせる。ところがドイツ文学の星野慎一氏にきくと、ドイツ語では人間の泣くのは〈weinen〉だが、鳥や獣のなく場合は、それぞれ特有なことばがある。犬がワンワンなくのは〈bellen〉クンクンなくのは〈winseln〉ウーとなくのは〈knurren〉遠吠ほえは〈heulen〉猿は〈schrein〉猫は〈miauen〉象は〈trompeten〉といったあんばいである。

象の〈trompeten〉や七面鳥の〈kullern〉は擬音語であるともいえる。日本語はこれらを區別せず「なく」で表現するかわりに「ワンワン」「ニャアニャア」「カンカン」「ピリピリ」といった擬音語をつけ加えることで区別しようとしたのかも知れない。しかし、それも口語のことで、日本の詩語たる雅言がでは、この種の擬聲音、とくに濁音、撥音はつを詩に用いることをさけているから、一そう語彙は貧弱たらざるを得なかったのである。それが詩歌にも使用されたのは十九世紀末以後である。

もっとも獣の名称やそれに関する分類が分化しているのは、西欧語の特色である。英語でも獣のなき方が brag (驢馬ろば)、low (牡羊)、bleat (羊)、grunt (豚)、squeak (鼠) などに對して、日本語では、鳥の鳴き方にいろいろの表現がわかれる。さえずる(小鳥)、なる(ほとと